碧巌寺

碧巌寺（へきがんじ、青い崖の寺の意味）は曹洞宗の寺院で、12 世紀に書かれた中国の禅宗の語録『碧巌録』にちなんでこの名が付けられました。この語録は、菊池に知的生活の花を咲かせたことで知られ、菊池氏の第 20 代当主であった菊池為邦（1430-1488）の人生を大きく変えました。彼は地域文化の熱心な支持者であり、武士や町民の学問や精神的な探求を奨励しました。

為邦は 36 歳で当主を引退し、城下町・隈府から離れた丘のふもとにある庵に引きこもりました。そこで彼は、当時日本の禅学者の間で特に大きな影響力を持っていた公案（物語、問答、質問）の語録である『碧巌録』の研究に専念します。為邦の死後、彼の隠居所は~~ぜ~~碧巌寺と呼ばれる禅寺となりました。

境内には、為邦の時代に流行した様式で、1996 年に再建された池のある石庭や、為邦の第二の墓である供養塔があります。為邦の本墓は菊池市北部の玉祥寺にあります。